様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４５３３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５９２４７０

研究課題名（和文）転移性肝がん患者への原発がん手術の体験を反映させた周手術期看護援助方法の考案

研究課題名（英文）Perioperative nursing for patients receiving metastatic liver cancer surgery that reflects their experiences of primary cancer surgery

研究代表者
小西　美ゆき（KONISHI, Miyuki）

兵庫医療大学・看護学部・講師

研究者番号：３０２９２６８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：原発がん手術体験を反映させた転移性肝がん患者の周手術期看護援助を検討するために、文献調査、患者を対象とした面接調査、看護師を対象とした面接調査、米国の私立病院の肝がん患者をケアする部門の視察を行った。
原発がん手術による心身の影響を考慮すること、転移がんに直面する患者の心理に配慮すること、今後も続くがん治療・療養に対する視点をもつこと、患者のもつがんとともに生きる姿勢や力を尊重することが看護援助を考えるうえで重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to devise perioperative nursing procedures for patients receiving metastatic liver cancer surgery that reflects their experiences of primary cancer surgery. We conducted a literature analysis, interviews with patients, interviews with nurses, and observation of a hospital in the United States. The results suggested that the following factors were important for nursing care: taking account of the influence of primary cancer surgery on patients' mind and body, considering the psychological dimension of patients with metastatic cancer, putting a focus on cancer treatment and recuperation that would continue after surgery , and respecting the attitude and power of patients living with cancer.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：転移性肝がん　がん看護　周手術期看護

## １．研究開始当初の背景

転移性肝がんの治療は、手術、経肝動脈塞栓・化学療法、ラジオ波焼灼術を始め、近年は大腸がんからの転移に FOLFOX を中心とする化学療法の有効性も実証され、その適応と就学的治療について多岐にわたり検討されている。それら各種治療のなかでも手術は、侵襲が最も大きいが、適応となれば有効性は最も高く、優先度の高い治療である。

肝臓へのがん転移は、胃・腸あるいは胆道・膵臓などの臓器のがんからが多く、原発がん手術に続く二度目の開腹手術は、消化管や腹膜・腸管膜の癒着などから手術操作の困難性が上がったり、出血や術後イレウスの可能性が高くなるなど、術前・術後の全身管理において留意すべき点が多くなる。患者にとっては、原発がん・転移性肝がんの二度の手術は、まったく新たな別個の出来事とも、あるいは前回に引き続く一連の治療とも、どちらにも捉えられることが考えられる。また、原発がんの手術体験は、転移性肝がんの手術を受けるにあたり、患者に肯定的・否定的両面の影響を与える可能性がある。肯定的影響としては、原発がん手術体験の回顧が、手術準備や術後経過に対するイメージ形成ならびに二度目の手術を乗り越えるための対処法獲得に役立つことが考えられる。一方、否定的影響としては、苦痛体験の想起が手術への拒否感や不安・恐怖を生じさせたり、過去に手術を受けたにもかかわらず肝転移したことによりがんに対する衝撃が強まったり、原発がん手術への徒労感や自身の無力感を生じさせることが考えられる。

転移性肝がんの手術を受ける患者のもつ複雑性を考慮した看護は、原発性肝がんで初めて肝切除術を受ける患者の看護とは異なる点が多く、転移がんに対する手術ならではの患者指導や早期回復を目指す特有の看護援助が重要といえる。

しかしながら、転移性肝がん治療の手術の多くは、切除範囲自体は小さいことから、文献等において術式ごとに論じられる看護方法やケア提供の注意点では、侵襲の比較的小さな手術として取り上げられることが多く、原発がん手術体験の影響を有意義に生かすことや、否定的影響に対する配慮等については記載されていない。

患者自身が原発がん手術体験の振り返りを通じて、肯定的影響を二度目の手術に生かし、否定的影響を克服あるいは軽減することで、原発がん手術体験を自らの意思で有意義な体験として意味づけ、再度のがん治療（手術）に向かうことができるように援助することは、患者の主体性を引き出し、手術を自分の課題として引き受ける姿勢をつくり、具体的な問題解決へと導くと考える。

また、肝転移は手術後も繰り返す可能性がある。このことは、二度の手術の試練が患者にとってはがん転移と共に歩む生活のスタートであることを意味し、患者はその後のがん転移・再発の脅威や検査・治療とともに生き、乗り越えていくための対処能力を身につける必要がある。過去の手術体験の振り返りにより獲得された自己効力感や達成感は、患者自身の体験に基づくゆえに、転移性肝がん手術への対処だけでなく、その後の再発・転移を意識した生活にも確固たる実感をもって前向きに取り組むことを促進できる可能性がある。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、(1) 肝がん患者の看護に関する現行看護学教育の教材等の精査および肝がんで手術を受ける患者の看護研究等の文献分析、(2)転移性肝がんで手術を受ける患者の原発がん手術体験の捉え方や転移性肝がんの手術に対する思いと取り組み方の実情の面接調査、(3)手術を受ける肝がん患者の看護に携わる看護師が考える転移性肝がん患者の看護の特徴の聞き取り調査、(4)がん患者の周手術期看護に先進的に取り組む米国病院の現場視察を実施し、これらの成果に基づき、転移性肝がんで手術を受ける患者の原発がん手術体験の振り返りを促進し、二度目の手術とその後に続くがん転移とともに歩む生活に備えるための周手術期看護援助方法を考案することである。

## ３．研究の方法

(1)肝がん患者の看護に関する看護学教育教材および肝がん手術患者の看護研究等の文献分析

2005～2010 年に発行された看護学の教科書・参考書、看護系雑誌等から、肝がんで手術を受ける患者の看護について記述された文献、ならびに 2001～2010 年に発行された肝がんで手術を受ける患者の看護について記述された看護研究の原著論文を収集した。看護学の教科書・参考書の収集には、一般社団法人日本医書出版協会の書籍タイトル検索で、肝がん、肝臓、消化器、手術、外科、看護、疾患別、看護過程をキーワードに検索した。また、医学系出版社 21 社の Web サイトで当該年の看護書籍のタイトルを確認した。

看護系雑誌掲載文献および看護研究の収集には、医学文献情報データベースの医学中央雑誌を用い、肝がん、肝臓、消化器、手術、外科、看護をキーワードに検索した。

教科書・参考書、雑誌の該当文献を収集した。

(2)転移性肝がんで手術を受ける患者の原発がん手術体験と転移性肝がん手術への取り組みについての面接調査

原発がん・転移性肝がんの 2 回以上の手術体験をもつ患者を対象にインタビューガイドに基づく半構成面接を実施した。原発がん手術・転移性肝がん手術時に体験した内容、手術や術後回復に対して患者が取り組んだ

こと、原発がん手術の転移性肝がん手術への影響などについてデータを収集した。がん診療連携拠点病院である大学病院の外科外来において、原発がん・転移性肝がんの手術体験をもつ成人患者に書面と口頭で研究の趣旨を説明し、研究協力は患者の自由意思であることや辞退・撤回の自由、匿名性などについて説明したうえで面接への協力を依頼し、同意が得られた患者を面接対象とした。面接はプライバシーの確保できる場所で研究代表者が実施し、対象者の許可を得て録音した。分析は、面接で得られたデータを質的帰納的に分析した。

(3) 手術を受ける肝がん患者の看護に携わる看護師が考える転移性肝がん患者の看護の特徴についての面接調査

手術を受ける肝がん患者の看護に3年間以上携わった経験をもつ看護師を対象に、インタビューガイドに基づく半構成面接を実施した。がん診療連携拠点病院でもある大学病院2施設において、看護師長の紹介を受けて研究代表者が研究趣旨の説明をし、同意が得られた看護師を対象とした。肝がん手術を受ける患者に特徴的な苦痛・侵襲、観察・アセスメント・患者ケアを実施するうえで留意・配慮していること、原発がん手術体験が転移性肝がん手術を受ける患者に与える影響などについてデータを収集した。面接はプライバシーの確保できる場所で研究代表者が実施し、対象者の許可を得て録音した。分析は、面接で得られたデータを質的帰納的に分析した。

(4) がん患者の周手術期看護に先進的に取り組む米国病院の現場視察

米国西海岸に位置する私立病院において、①治療開始前の患者教育・指導、②術前指導、手術当日（入院時）のケア、③術後から退院までの看護のそれぞれを担当する部門の医療スタッフから患者ケアの実際について説明を受け、病院施設の視察を行った。

４．研究成果

(1) 肝がん患者の看護に関する看護学教育教材および肝がん手術患者の看護研究等の文献分析

看護学の教科書・参考書からの該当文献は29件、看護系雑誌の文献は41件、看護研究の原著論文は19件が収集された。

各文献の対象読者、筆者の属性、看護実践の記述内容などを分類してデータベース化した結果、教科書・参考書は看護学生対象が多く、看護系雑誌文献は、雑誌本体が看護実践者対象の刊行物が多いため、実践者を対象として書かれていた。筆者は、教科書・参考書は教育・研究者、雑誌文献は看護実践者と医師が多かった。看護に関する記述内容は、肝がん術後の出血、肝不全(肝機能障害)について記載されたものが多く、他に創痛、血糖コントロール、胆汁漏、呼吸器合併症、不安に対する心理的援助などについて記載されていた。

看護研究のテーマは多岐にわたり、周手術期の回復に着目するもの、肝炎・肝硬変から肝細胞がんへの移行、転移・再発等長期のプロセスを記述するものなどがあった。転移性肝がんで手術を受ける患者の看護に焦点を当てた文献は少なく、特にその特徴や原発がん手術との相違に言及した文献はほとんど見られず、特徴の明確化や看護援助方法の考案の必要性が示唆された。

(2)転移性肝がんで手術を受ける患者の原発がん手術体験と転移性肝がん手術への取り組みについての面接調査

対象は11名であり、性別は男性7名、女性4名、年齢は53～74歳(平均63.5歳)であった。全員が大腸がん原発であり、大腸がん・転移性肝がん手術のほかに、胃がん、転移性肺がんの手術も体験している者もいた。2名の対象者は本人の希望により一緒に来院していた家族が面接に同席した。

対象者の原発がん手術体験のとらえ方、転移性肝がん手術に対する思いと取り組み方は、原発がん手術をより心身の苦痛の強い体験ととらえる、肝臓へのがん転移に原発がん罹患以上の衝撃を受ける、大きな不安や苦痛なく2回の手術を乗り越えるなど、多様であった。また原発がん手術体験が転移性肝がん手術に与えた影響は、肯定的・否定的影響の両側面があり、影響を与えなかったと考える対象者もいた。

転移性肝がん手術を受ける患者に対して、原発がん手術体験および肝臓へのがん転移をどのようにとらえて2回目の手術に向かおうとしているかをアセスメントして、そのとらえ方に応じた心身のケアを提供することの重要性が示唆された。

(3) 手術を受ける肝がん患者の看護に携わる看護師が考える転移性肝がん患者の看護の特徴についての面接調査

対象は看護師7名であり、平均年齢32.3歳、肝がん患者看護の経験平均年数7.3年、看護師経験平均年数10.6年であった。転移性肝がん患者の周手術期看護には、手術患者に共通する看護、肝臓手術に特徴的な看護、さらに転移性肝がん手術ゆえの特徴的な看護の視点が必要とされることが明らかとなった。また、患者の原発がん手術体験の転移性肝がん手術への影響は、心身両面の影響を挙げる看護師がいる一方で、影響が感じられないとする看護師もいた。

(4) 米国病院における肝がん患者の看護に関する現場視察

治療前の患者教育では、肝がん治療には選択肢が多く、治療前クラスに参加する患者の病期・病状も多様であるため、指導内容を精

査して、患者が各治療や長期的療養過程の概要・全体像を理解できるよう工夫していた。
　術前指導は、手術が決定して患者が入院するのが手術当日であるため、資料や教材の送付と電話で行われていた。患者からの電話による質問を受ける専門の看護師が対応する窓口があり、必要に応じて医師にも相談・質問ができるシステムが整えられていた。
　術後の退院指導、生活指導は、術後回復の状況に合わせて開始されていて、指導教材が充実していた。

(5)手術を受ける転移性肝がん患者に対する周手術期看護に必要とされる看護援助の要素
　文献分析、患者を対象とした面接調査、看護師を対象とした面接調査、米国病院の視察の結果から、転移性肝がんで手術を受ける患者に必要とされる看護援助の要素を抽出・検討した。①転移性肝がん手術による直接的侵襲だけでなく、それに先立つ原発がんとその治療による身体機能の変化を考慮すること、②原発がん罹患に加えてがんの転移に直面した患者の心理に配慮すること、③転移性肝がん手術後も続くがん治療・療養を視野に入れること、④患者自身がもつがんとともに生きる姿勢や力を尊重すること、が重要であると示唆された。
　今後は、これらの要素に基づいて具体的な看護実践方法を構築し、検証することが必要である。

５．主な発表論文等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　小西　美ゆき（KONISHI, Miyuki）
　兵庫医療大学・看護学部・講師
　研究者番号：３０２９２６８４

(2)研究分担者
　佐藤　禮子（SATO, Reiko）
　関西国際大学・保健医療学部・教授
　研究者番号：９０１３２２４０